

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	唐津市立切木小学校
1 前年度 評価結果の概要	・学校教育目標を実現するために、学校の様々な場面で自己決定の場を設定し教育実践及び授業改善に取り組んできた。また、共感的な人間関係を構築するために、道徳科の学習や縦割り活動を通して、学年の枠を超えた児童同士の自己理解や他者理解の深化に努めてきた。今後は、プログラミング学習を中心に論理的に思考し表現する力(気付きや考えを具現化する力)の育成を図る。 ・「唐津の学びのスタイル」を基に、校内研究や授業改善及びGIGA端末利用促進の取組を進めてきた。その結果、児童及び保護者の意識調査では、「授業の内容理解」や「個に応じた授業改善」の項目において肯定的な意見が9割を超える結果となった。また、学力面においても、佐賀県学力・学習状況調査では、半数の調査において県の正答率を上回る結果となった。今後は、課題が見られた教科及び領域の指導法改善を図ると共に、GIGA端末を利用した学力向上の取組を推進していく。 ・地域との連携を深めるために、メールやホームページを活用した情報発信に努めてきた。また、地域の方々の意見や願いを基に、地域と学校が一体となって様々な活動を行ってきた。コロナによる規制が緩和の方向に向かう今年度は、以前に行っていた行事の見直しを含め、児童の郷土愛情勢のために、地域と学校が一体となれる取組を推進する。
2 学校教育目標	テーマ:笑顔はじける切木小学校 学校教育目標 「自ら 気付き 考え 実行する」児童の育成 ～「出番,役割,関わり,承認」を通して～

3 本年度の重点目標	3つの重点目標 ① 自ら学ぶ児童の育成 ②「思いやり」の心をもつ児童の育成 ③ たくましい心と体をもつ児童の育成
------------	---

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目										主な担当者
重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	○「唐津の学びスタイル」の「個別最適な学び」「協働的な学び」に関わる教員の意識調査において肯定的な回答率2.5以上	・「唐津の学びスタイル」でラーニングマウンテンを共有するとともに、校内研修等により取組を推進する。	A	・全国学力・学習状況調査と県学習状況調査の分析会を開き、児童の学習面の課題や今後の取組を話し合い、共通理解することができた。	B	・「唐津の学びスタイル」の「協働的な学び」に関しては、2.67と目標を達成することができたが、「個別最適な学び」に関しては2.09と目標を達成することができなかった。引き続き、「唐津の学びスタイル」を推進し、特に「個別最適な学び」に関して全教職員で研修・研鑽していく必要がある。	A	・「わかる・できる・楽しい」授業づくりのために工夫されていると思う。	・学力向上対策コーディネーター(井上)
	○授業規律と学習の進め方の工夫 「わかる・できる・楽しい」授業づくり ○課題に対して試行錯誤しながら問題解決できる児童の育成	○「授業がよく分かる」と回答する児童や保護者90%以上 ○根気強く問題解決できる児童の割合80%以上	・「唐津の学びスタイル」に基づいた授業実践において「自己決定の機会の充実・自己理解の促進・共感的な人間関係の育成」を目指した指導の充実を行う。 ・論理的思考を高めるためのプログラミング教育の授業実践を推進する。	A	・「唐津の学びスタイル」の研修会を開き「ラーニングマウンテン」「個別最適な学び」についての学校としての方向性を共通理解した。1学期末のアンケートで「授業が分かる」と回答した児童は97%で目標を達成することができた。 ・校内研の「環境部」では、論理的思考を高めるための「話型」を作成し、授業での活用を進めている。「難しい問題も諦めずに解くことができる」と回答した児童は85%で目標を達成することができた。	A	・共通理解を図り、全学級でラーニングマウンテンを実施することができた。3学期始めのアンケートで「授業が分かる」と回答した児童は94%で目標を達成することができた。教職員一人一人が授業改善に努めることができた。 ・県指定のプログラミング教育の研究発表で4年生がmicro:bitを活用したプログラミングを発表した。他の学年でも実際に応じてプログラミングの授業実践を行うことができた。3学期始めのアンケートで「難しい問題も諦めずに解くことができる」と回答した児童は89%で目標を達成することができた。	A	・教科によっては、苦手意識が先行して諦めてしまう子もいると思うので、興味をもたせる取組が必要だと感じる。	・学力向上対策コーディネーター(井上) ・研究主任(永石)
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「道徳の授業で、自分の考えを深めたり、友達と話し合ったりする活動をしていると思う」と回答した児童85%以上 ○「温かな心・言葉・行動」ができたと思うと回答した児童85%以上	・道徳科を中心に自己理解や他者理解を図り、様々な教育活動において人権意識の向上に努める。 ・縦割り班活動や体験活動を通して「心の教育」を充実する。	A	・「道徳の授業で、自分の考えを深めたり、友達と話し合ったりする活動をしていると思う」と回答した児童は90%で、目標を達成することができた。また、「困っている友達がいいたら、声を掛けたり助けたりしている」と回答した児童は85%いた。 ・縦割り掃除や地域が主催する行事に参加することで、異学年交流や地域の老人会との交流をすることができ、その結果として「温かな言葉掛けや行動ができた」と全ての児童(100%)が感じていた。	A	・「道徳の授業で、自分の考えを深めたり、友達と話し合ったりする活動をしていると思う」と回答した児童は87%で、目標を達成することができた。 ・縦割り班対抗ドッジボール大会に向けて、みんなが仲よく楽しめるような工夫を話し合った。また「困っている友達がいいたら、声を掛けたり助けたりしている」と回答した児童が86%いた。	A	・道徳的な規範意識や生活でどう生かすかに関して、学校ではきちんとできていても、学校外になるとできなくなる子もいると感じるので、家庭での取組の推進が必要だと思う。	・道徳教育推進教師(徳永) ・人権・同和教育担当者(佐志) ・特活部
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていると回答した教員85%以上 ○いじめをしていないと回答する児童85%以上	・生徒指導及び児童理解に係る共通理解を行う場を学期に2回設け、全職員で児童を育てる体制と意識づくりに努める。 ・いじめと体罰に関するアンケートを実施すると共に、学期に1回、教育相談の充実を図る。	B	・いじめや生徒指導に関する問題が発生した際、全教職員で共通理解を図り、早期発見・早期解決・再発防止に努めることができた。しかし、生徒指導及び児童理解に係る定期的な情報交換ができなかった。 ・「いじめや仲間外れをしていない」と回答した児童は90%で目標を達成することができた。	A	・「いじめのない学校づくりのための組織的な対応ができている」と回答した教師は100%だった。定期的な情報交換をするための時間をつくり出すことが難しいが、学校生活アンケートの情報交換も兼ねて今後も定期的に行っていくきたい。 ・「いじめや仲間外れをしていない」と回答した児童は95%で、目標を達成することができた。	A	・いじめに関することについては、家庭への啓発を行い、学校と家庭が連携した取組を継続することが重要だと考える。 ・「いじめ」とはどういった行為なのか、どういったことが「いじめ」につながるのかを学校と家庭で考えていく必要があると思う。	・生徒指導主事(井上) ・生活部
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・授業において児童の変容を見取ることで、各教科等における成長や深まりを認める工夫をする。 ・教育活動全体を通して、キャリア教育的な体験活動を重視し、将来についての明るい見通しをもたせる。	B	・授業中の発言や授業後のノート記述を基に、児童の各教科における成長や考えの深まりを認める取組を行った。 ・各学年、キャリアパスポートを活用している。「夢や目標をもっている」と回答した児童は93%で、目標を達成することができた。	A	・3学期始めのアンケートで「先生は、よいところを認めたり、褒めたりしてくれる」と回答した児童は89%で目標を達成することができた。全職員で児童を見取り、声掛けができた。 ・3学期始めのアンケートで「夢や目標をもって勉強やスポーツをしている」と回答した児童は84%で目標を達成することができた。	A	・6年生を送る会の一コマで、将来の目標を地元企業に向けている6年生がいた。キャリア教育が実を結んでいると感じた。	・指導教諭(井上) ・特活部
	○(学校独自重点取組・任意)	○(学校独自成果指標・任意)	・							
●健康・体づくり	●「運動習慣の改善や定着化」 ○望ましい生活習慣の形成	○授業以外(昼休み等)で、外での運動やスポーツを行う児童85%以上 スポーツチャレンジ前に、練習をしている児童85%以上 ○「早寝・早起き・朝ごはん」の実施率90%以上	・外遊びの奨励及び、個人の目標を設定したスポーツチャレンジに取り組ませる。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」カードによる取組を行い、家庭と連携して望ましい生活習慣の意識付けを行う。	A	・昼休みなどに外で体を動かして遊んだりスポーツをしたりしている児童は79%で目標達成できている。 ・早寝・早起き・朝ごはんの実施率は92%と目標を達成できているが、今後、カードによる取り組みを行い、さらに意識を高めていきたい。	B	・3学期始めのアンケートでは、「昼休みや体育の時間には元気に体を動かしている」と回答した児童は88%で、前回よりも更に目標を達成することができた。 ・早寝・早起き・朝ごはんはできていない」と回答した児童は82%と前回を下回り、目標に達しなかった。	A	・学校では、外遊びを通じて楽しく体を動かすことができていると思う。 ・ゲームやインターネットが普及していて、家庭では、家にもこもって外で体を動かすことが減ってきていると感じる。	・体育主任(濱井) ・養護教諭(福島) ・保体部
	○(学校独自重点取組・任意)	○(学校独自成果指標・任意)	・							
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・業務内容の精選及び勤務時間運用の効率化を行う。 ・曜日毎に退勤時刻を設定し、定時退勤の取組を推進する。	A	・校務分掌に係わり、業務内容別に、「何を、いつまでに、どのようにするか」を明確に示して提案することで、業務の効率化を図った。その結果の表れとして、夏休み期間中の年休取得率が向上した。 ・毎週金曜日を定時退勤日と決め、全職員で厳守する取組を行った結果、8月までは100%の実施率であった。	A	・余剰のPCとモニターを職員室に設置し、現在進行中の業務や期限を可視化した。結果的に、時間外勤務の削減を意識できた全ての教員が感じている。 ・金曜日の定時退勤日を守る取組を推進することで、勤務時間の適正化を図った。取組が定着すると同時に、定時に退勤しようとする意識の醸成になったと考える。	A	・通勤時間がとても長い先生もいるので大変だと思う。 ・業務改善を進めていただき、無理なく働けるようにしてもらいたい。
○(学校独自重点取組・任意)	○(学校独自成果指標・任意)	・								

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										主な担当者
重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別な配慮を要する児童への理解が向上した教員80%以上	A	・特別支援に関する研修や校内支援研を通して、合理的配慮を要する児童への理解が向上したと回答した教員が100%の結果となり、成果が見られた。	A	・特別支援に関する研修や校内支援研を通して、児童理解が深まったと回答した教員が100%の結果となり、目標を達成することができた。 ・支援を要する児童について、校内支援委員会を行い、共通理解を図ることができた。	A	・研修会を実施して資質の向上に努められていると感じた。 ・今後も、子供たちみんなが楽しく、笑顔で学校生活を送ることができるように配慮していただきたい。	・特別支援コーディネーター(徳永)	
○プログラミング教育推進	○一人一台端末を活用した授業の研究	○一人一台端末を利用したプログラミング学習を実施した教員80%以上		A		・2年生以上の学年は、一人一台端末を利用したプログラミング学習を実施することができた。		A		・校内研でプログラミング学習に取り組んだことで、一人一台端末を利用したプログラミング学習を実施した教員が85%となった。 ・プログラミング学習についての教員の理解が深まり、成果と課題が明らかになった。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	・学校教育目標の実現に向け、学校評価の各項目について具体的な内容と指標を定め、学校の教育活動を展開してきた。教員の自己評価としては、概ね良好であると言える。これは、具体的な取組や指標を示し、教育活動を推進したことにより、目に見える形で成果を実感できたことによると考える。児童の評価としては、肯定的な回答が多かった。教師が日々の授業や生活の中に評価を意識した活動を取り入れたことにより、円滑な実践へとつながり、その成果が児童にとっては成長として実感できたことによると考える。保護者の評価としては、肯定的な回答が多かった。これは、子供たちの様子や学校からの情報発信により、評価の内容について知る機会があり、その成果を子供たちの姿に見ることができたことによると考える。次年度は閉校に向かう年である。今後の展望として学校と家庭、また、家庭と地域が密接に結びつく場としての学校の在り方を考え、子供と家庭、地域を豊かにする教育の推進を行う。 ・学校評価に関わるアンケート結果から、次の2点が覗えた。1つ目は、「学力向上」について、「ラーニングマウンテン」や「唐津の学びスタイル」を提案したことが教師の授業改善につながり、日々の教育活動において児童の意欲が向上したこと。2つ目は、「心の教育」について、主体的に学び、学んだことを基に考え、考えたことを実行できる児童の育成を目指すしたことにより、共感的な人間関係の育成が円満に行えたことである。今後は、更なる教育力の向上に向け取組を推進していく。 ・最終評価では、他項目に比べ「学力向上」と「健康・体づくり」の一部で低い評価が見られた。課題としては、「個別最適な学びの補償を如何にすべしか」と「家庭での生活習慣の向上の更なる推進」が挙げられる。以上の2項目については次年度改善できるよう取組の刷新を行う。
--------------------	---